

# 『内側から見たアメリカ人の習俗』

(フランセス・トロロープ著 一八三二年出版)

(原題: *Domestic Manners of the Americans* by Frances Trollope 1832)

杉山直人訳

## まえがき

アメリカについて記したこの本<sup>1)</sup>を世に送り出すに際しては、厚かましくも筆者が完璧な情報を提供したがっているというより、まことに重要な主題について、みなさまがたの新たな注意を喚起したがっているのだ、とお考えいただくとありがたいです。

大西洋の向こう側の政府にあって今行われつつある、いわゆる偉大な実験については、すでに多くが記されてきましたが、かの国の政治体制がアメリカ固有の生活指針、嗜好、それに習俗に及ぼした影響をめぐる興味深い詳細については、まだ語るべき余地が残っているようです。

---

1) 入手しやすい版は二種類。「ペンギンクラシックス版」と二〇〇九年からケンブリッジ大学出版局が（おそらくはオンデマンド）出版するようになった「ケンブリッジ・ライブラリ・コレクション」所収のものである。どちらも初版に依っており、特にケンブリッジのものは完全復刻本らしく、貴重な挿絵が十枚以上収録されている。これらの初版本とは別に、一八三九年になって発行された第五版の復刻本も入手不可能ではない。本稿は基本的に初版本テキストに依拠しているが、第五版に依った箇所もある。テキストのどの部分が、どちらの版に依るのかは上梓のさいに明示するつもりである。ちなみに翻訳作業は、二〇一〇年師走現在、約八〇%を終了している。

以後の記録のなかで、こうした不足分をいくばくかでも筆者は埋め合わせようとなりました——アメリカ各地での三年半に及ぶ暮らしのなかで、運良く観察できたことを注意深く記録したのです。

アメリカ政府の民主主義形態について批評するという、もっと野心的な仕事は、筆者より有能で筆のたつ方々にお任せしました——そうではなく、ありふれた暮らしぶりを忠実に描くことで筆者は、多数ではなく少数の人によって統治される人びとの側にこそ、どれほど強みがあるかを示そうとしたのです。彼女が念頭においてきた主目的は、同国人たるイギリスの方に、確立された習慣と堅固な原理原則が生み出すすべての恩恵を保証する国体に忠義を尽くすよう、お勧めすることでした。習慣や原則を捨ててしまうと、自らの平安を台無しにするという、恐ろしいリスクを招来することになり、不快な騒ぎやあまねく退廃を招くこととなるでしょう——大衆の手に国家の権力をすべて委ねるといふ狂気じみた計画のあとは、かならずそうなるのです。

アメリカ合衆国には新しいものや美しいものがたくさんあり、素晴らしいものもなかにはあります。ほかにも、かなりの種類の興味深いものが自然科学のほとんどの分野で見つかります。しかし、哲学的探求者の注意が向くのはなにより、そこに住む人びとの道徳的、宗教的状态なものですから、この問題にもっと世間の関心を目覚めさせることができさえすれば、筆者としては自らの仕事を完璧な成功と考えるものです。

ハローにて

一八三二年 三月

## 第一章

### ミシシッピ川河口—ルイジアナ州バリーズ

一八二七年十一月四日、息子と二人の娘を伴ってロンドンから船出したわたしは、いささか退屈とはいえ幸先よい航海ののち、クリスマス当日にミシシッピ川河口に到着した。

陸地への接近が最初に分かったのは、この力強い川がはき出す泥のような流れがメキシコ湾の紺碧と混じりあう姿だった。岸が川面と完全に平らになっているおかげで、海からは岸辺の物がなにもわからず、七週間の航海で疲れていたわれわれは、遂にたどり着いたことを語りかけてくれる、目のまえの泥色の海を凝視して嬉しかった。さまざまに姿を変えて長いあいだ大いに楽しませてくれた輝くような青い海をあとに、われわれを迎えてくれた泥の流れに入ったときは、後ろ髪を引かれそうな思いがなかったと言えば嘘になるが。

水面から顔をのぞかせる長く続くぬかるみに、ペリカンの巨大な群れがたたずむのが見られ、陸地が分かるようになるずっとまえから、水先案内の誘導で船は干潟を越えていった。

ミシシッピ川のこの河口ほど徹底的に荒廃した光景を、わたしは目にしたことがなかった。ダンテが見たとすれば、その恐ろしさで別のボルジアのイメージを描いたかもしれないほどである。渦巻く流れから突き出ているものと言えば、干潟を越えようとして、はるか以前に座礁した船のマストただ一本きりで、訪れてくる破滅を不吉に予言しながら、過去に起きた破壊のわびしい証言者として今も持ちこたえている。途方もなく大きく育ったガマ（訳注 淡水の湿地に生えるガマ科の多年草）が少しずつ見えてきて、泥水のなかを数マイル進むうち、小屋が何軒か寄り合ったバリーズが姿を現した。人の住まいとしては見たこともないほど、たいそうみずばらしい補給所だが、水先案内や漁師の家族が大勢暮らしているという。

河口からさかのぼること数マイル、ミシシッピ川で興味深いものといっても、ぬ

かるんだ土手、巨大なガマ、へどろを楽しむ大きなワニがときどき出てくる程度。このわびしい光景を更に荒涼とさせているのが夥<sup>おびただ</sup>しい量の流木で、いろんな河口めざして進んでゆく。しばしばやって来る台風の犠牲となった長大な木々が枝を付けたままだったり、さらに多いのは根こそぎになった根っこを付けたまま、流れを下ってくる。こうした木々のなかには絡まりあい、漂ってくるガラクタを枝のあいだにため込んだものがあり、その姿はさながら、根っこが天をあなどる森をいたたく動く島といった風情で、面目を失った枝がむなしい報復のために流れを打つのだった。船に近づいては側を素早く流れすぎてゆくこの島の姿は、破滅した世界の断片さながらである。

だが進んでゆくうちに、冬なのに燦<sup>きら</sup>めくような色合いをした、南部の植物にわたしたちは慰められた。川岸は相変わらず平らだったが、無計画に建てられた屋敷—そこに住む人たちの住みだけのものであれば、まわりをサトウキビ畑や黒人小屋が囲んだものもある—が続き、景色に変化をつけていた。画家のいう中景というものが、どこにもまったく見つからない。バリーズからニューオーリンズに至る百二十マイル、それにニューオーリンズから北方百マイルにかけては、レヴィと呼ばれる高い堤防が川の浸食から土地を守る。この堤防がなければ、土手よりも川のほうが明らかに高いのだから、住宅などすぐに消え失せよう。われわれがたどり着いたときは、長くやまない雨がいつも降っていたが、堤防が姿をあらわしたのは驚くべきことであり、考え得るもっとも人為的様相をこの偉大な自然の姿に与えていた。人がずっと忙しく働いてきたばかりか、自然の最も強力な仕事にさえ、人間は刻印を記すことが明らかだった。スイフトの擬似英雄詩が、文字通り思い出される。

#### 「自然は技術に道をゆずる」

とはいえ、自然はたいそう強力で征服されることを知らないのだから、いつの日か自らの手にふたたび事態を取り戻すだろうと想像たくましくせざるを得ず、そうなればニューオーリンズともお別れとなろう。

こうした景色に美がまったく欠落しているのは容易にご想像いただけよう。とこ

ろが、陸の風景や音をすべて奪われてきたのを耐えてきたわたしたちには、未知の木々と植物の形や色合が加わったものだから、沼地のような岸辺さえ美しく見えてしまった。陸地を見るばかりか、触ってみたい思いに駆られたのである。ただし、バリーズからニューオーリンズまでの航海は困難にして退屈、おかげで航海に要した二日が船でそれまでに過ごしたいかなる日々より長く感じられた。

じっさい、自然の現象を観察するのが楽しみな人であれば、飽きもせず航海が数週間続いても平気だろう。だがなかにはおそらく、海と空など一瞥すればじゅうぶんで、それ以上は海にも空にもなにもない、それどころか一瞥して分かるのは壮大さよりもわびしさの方かもしれない、とお思いのかたもあろう。しかしわたしには、海や空の変化は尽きることもなく無限である。対象がはっきりして明確でも、風景を描写しようとするとなかなか成功はおぼつかないが、風景の印象がたいへんに微妙で変化に富むとなると絶対だめである。とはいえ、風景の印象というのは他のなによりも深いものだろう。巨大なミシシッピ川の長大な流れを見つめたときにどんな気持ちだったか、今のわたしは忘れていたかも知れない。わたしの記憶のなかでは、オハイオ川とポトマック川がごちゃませで、他の川の流れといっしょになっているかも知れない。だが、わたしに記憶がある限り、大西洋の日の出と日の入りは決して忘れられない。

今わたしたちを取り巻くのは、もはや大西洋と名状しがたいその魅力ではない。後甲板を歩くのは、粉ひき小屋のロバの修練さながらだという気になるし、本はページが半分なく、残り半分は空で覚えてしまい、牛肉は塩辛くてパンもえらく固く感じられるようになった。つまり、乗船していたエドワード号という立派な船を船首から船尾まで知り尽くしたわたしたちは、最後には帆という帆の名、あらゆる滑車の使い方まですべて分かり、みんなで小さなベッドに身を寄せあって横になると、わたしは大いなる喜びで、

「あすは初めての畑と、新たな牧草地へ」

と感嘆の声をあげたのだった。

## 第二章

### ニューオリンズ—社会—クレオールとクアドルーン

#### —ミシシッピ川をさかのぼる船旅

新世界の新たな大陸にある新しい国の大地に第一歩を踏みしめると、いやがうえにもかなり興奮したし、出会うものほとんどすべてに深い興味を覚える。目の肥えた人を満足させるようなものはニューオリンズにはほとんどないが、それでもヨーロッパから来た新参の人間にすれば、関心を引く目新しいものはたくさんある。通りで出会う黒人の比率は高く、肉体労働はみんな彼らがしてくれ、クアドルーンの女性（訳注 白人と黒人との混血女性、以下混血女性）たちは優美だし、野蛮でどう猛な感じがするインディアンの集団を見かけるかと思うと、珍しい姿の植物もあり、低い岸辺がぬかるんだ泥だらけの巨大なミシシッピ川など、すべてが未見のものを目にしたときに得られるたぐいの楽しみをもたらす。

ニューオリンズの町はフランス風鄙<sup>ひな</sup>といった風情が多分にあるが、それもそのはず、かつてはフランスの町でスペインからぶんどったのである。通りの名はフランス風で、言葉は英語とフランス語が半分ずつといったところ。市場は立派で商品も豊富、生産品はみんな川で運ばれてくる。川での仕事を調節しながら気を紛らわすときに黒人船頭が歌う歌は、ずいぶん楽しめた——旋律はわづかしかないが、甘くてハーモニーがとれており、それに黒人の声はほとんどいつも豊かで力あふれる。

ニューオリンズで過ごした時間のなかで断然快適だったのは、子供たちといっしょに近くの森を探索したときだ。「西の世界にある永遠の森」を歩いたのはこれが最初で、ちょっと荘厳で詩的な気分になった。全般に木々が密集しすぎて、大きくもならないし生育もよくない——ほかに名前が分からなかったのだが、「スパニッシュモス」とかいうヤドリギのためにときに成長が妨げられることもある。枝から優雅に垂れ下がり、木々の外形を枝垂れ柳の姿に変えてしまう。この辺りの森で第一に美しいのは「パルメット」という生い茂った下生えヤシで、わたしの知っている、いちばん可愛い色をしたもっとも優雅な植物である。ポーポーも見事な灌

木で、ふんだんに茂っている。アメリカに来てから、ニューオリンズではじめて野生のブドウを目にしたが、あとで全国各地どこでもたっぷり生育しているのに出くわすことになり、肥沃な土地が生み出す多くの生産品のなかに、土地の人はワインも加えるべきだ、とわたしは考えたほどだった。垂れ下がった頑丈な花<sup>はなづな</sup>糸は安全で手頃なブランコになったから、さっき言ったように荘厳な気分<sup>はなづな</sup>に浸りながらも、わたしの子供のなかにはブランコを楽しむものも出た。

ニューオリンズにいたのは真冬だったが、心地よいというよりは暑く、蚊がしょっちゅう出て、ひどく悩まされた。とはいえ、クリスマスに戸外でオレンジやエンドウ豆、それにレッド・ペパーが見られるのだから、少しのあいだ蚊くらい我慢しただろう。あるときそぞろ歩きしていると、生け垣に輝くようなオレンジの木を植えた庭があり、注意が向いたので思いきって入ってみた。食卓にいつでも出せるエンドウ豆、それに日の光を受けてレッド・ペパーが豊かに生育していた。屋敷の階段を若い黒人女性が掃除していたが、彼女が奴隷であることに、わたしたちは気を引かれた。話しかけた初めての奴隷だったのである。だから、じゅうぶんに優しく声を掛けずにはおれなかった。あわれこの女性は、自分がわたしたちにどれだけ哀れみをかき立てたかなど、ほとんど夢にも思わず、丁寧に陽気に受け応えしてくれ、わたしたちがレッド・ペパーのサヤがなにか特別なもののように思いこんでいたのおもしろがり、いくつか分けてくれた。わたしのほうは、そんなことをすると女王<sup>あるじ</sup>が彼女を責めるのではないかとびくびくしたが。無知のために人はいくらでも幼稚になるし、風聞だけに頼ると、ほとんどどんな話題についても、いかにも物しらずとなる。

奴隷制に激しい反対感情を抱いてイギリスを発ったわたしだったので、その影響を自分の周りで目撃するにつけて苦痛を感じた。通り過ぎてゆく黒人男性、女性、それに子供の誰を見ても、わたしの空想はその一人一人が主人公になる、小さくとも悲惨な物語を紡いでしまった。奴隷制をめぐってもっと多くを知り、アメリカにおける奴隷たちのほんとうの状況がよく分かるようになると、わたしは折に触れ、その頃自分が感じたことを思いだして微笑んでしまった。

アメリカ的平等をわたしが感じとった最初の兆しは、帽子を製造している女性に紹介されたときだった。字の輪郭がぼやけた「ミス・Ｃ・・・」と書かれた下宿屋でもなく、通りで出会って流行の化粧を覆うベールを通してでもなく、彼女がカウンターの背後に立ち、リボンや針金について指図し、帽子やボンネットを作りだしている、まさにその聖堂の奥で紹介されたのである。彼女は英国人で天賦の知性を持ち情報通、ということだった——これは確かだったとわたしは信じている。物腰は屈託なく優雅にして、フランス風所作が身についている——涼しいまなざしと甘い声で若い女黒人奴隷の動きを指図する優雅さは、じっさい感心するほどだった。ファッションについて顧客と語るときのフランス語の語らいと、抽象論について友人たちと語るときの英語の語らい双方を溶け込ませる彼女の様子は、無頓着でいながら巧みな雰囲気こそなえ、どちらの語らいにも長けていた。

女主といっしょに、判事のお嬢さんにもお目にかかったが、彼女は法律や文芸方面に秀でているという噂で、ニューオーリンズを後にしてから、さまざまな筋の人からこのお嬢さんとの付き合いを、才能あるすべての人が高く買っている、と耳にした。だが、旅行者よろしくここで足を止めたわたしが、最エリート層をリードするのが帽子製造業者であることをアメリカの国民的特質、あるいは共和制的慣習と考えたとすれば、事実を大いに偽ることになる。再度同じことがわたしに起きた記憶はないわけで、これは未知の国に入ったときに、あらゆる環境が与える、おびただしい印象例のなかのひとつにすぎず、どれほど偶然であれ、国民的かつ特徴的とすべてのことを分類したがる抗しがたい傾向のひとつにすぎない。もっとも、類似した変則例がアメリカでいつも起こるわけではないにしても、ほかの国ではほとんど不可能なのは確かである。





PHILOSOPHICAL MILITARY STORES.

ミス・C・・・の店でわたしはマックルア氏に紹介された。尊敬すべき人物にして紳士らしい容貌をそなえ、五分ほどのあいだに「無知こそが悪魔」、「人は自らの力で生きる」などなど、格言をいろいろ口にした。彼はニューハーモニー学校の出、というかニューハーモニー学校が彼から出たのである。資産家で（きっとスコットランド人である）まあまあ放蕩に暮らしたあと、「幼いスパルタの子どもた

ちを鞭打つように命じたりクルゴスが愛したような高邁な思想を心に描き、決意も固くニューハーモニーに哲学学校を創設して子どもたちを益し、自分も永遠の名声を得ようとしたのである。ロバート・オーエン氏の徹頭徹尾公明正大な法制定に感じ入った彼は、わたしの理解できたところによれば、いっしょ徹頭徹尾公明正大な教練によってオーエン氏の見解を助けようと、自分が確保できた生徒たちすべての若々しい考え方を教育しては平行四辺形的様式と秩序に投げ込もう、ということだったらしい。わたしが耳にしたニューハーモニー学校の人々はみんなそうだったが、この尊敬すべき哲学者は、完全無欠の制度をめぐって高尚な空想をひねり出すほうが、制度の実践を目にするよりも、お気に入りだった。すいぶん気前よく高貴な書籍全集や科学器具を買い込むと、それを彼は未開の地に運んだ、だが、自分のように自由で広大な物の考え方ができる男を一人も発見できず、一人の女性を選んで組織済みの機械を動かしたのである。彼女との付き合いは長かったし、ちまたの噂では、すいぶん懇ろ<sup>ねんご</sup>だったというので、彼女の管理下なら規則違反も起るまい、と確信したわけ。ふたりは一心同体で行動したが、男は魂の役割を果たしてすべてを決め、女性のほうは体の役割を果たして、すべてを執りおこなう、はずだった。

この計画の主たる特色は（最初に気前よく学校の装備一式を提供したのはマックルア氏）学校を維持するための出費を男女生徒たちの労働からあがる利益でまかなう、ということだった——勉強や科学調査と交代で、毎日一定の間隔をおいて働いてもらう、というのである。ところが不幸にも、インディアナの気候が、こうした制度の特徴的形成にふさわしくないのを知った学校の魂たる男性がメキシコに逃げ出したおかげで、体の役割を果たすことになっていた女性は、気に入った最善の方法で魂と体の双方を稼働させねばならなくなった。フランス人のこの女性は魂たる男性をわずらわせずとも、たやすく活発に仕事にとりかかり、やがて機械というのは簡素であればあるほど、その働きが完全になることを知り、学校事業の知的部分と関連するあらゆるものをかなぐり捨て、誰にも劣らぬほど立派に奮起しては、自分たちふたりが集めた若者たちの筋肉や体力から富を引き出すことになった。こ

の哲学学校について、わたしが最後に耳にしたところでは、彼女と遠縁の甥が素晴らしい収穫を刈り取っているという。というのも、無償教育が受けられるというので、若者たちの多くは貧しい親元から送られてきており、学校を後にするだけのお金も持っていないからである。

社交界に入ってゆくほど、わたしたちのニューオリンズ滞在は長くなかったが、社交や優雅な気晴らしでそれぞれ名高い、ふたとおりの異なる人たちがいるのは耳にした。最初の人たちはクレオール一門で、妻も娘もいる農園主や商人たちが中心だった。この人たちは顔を合わせて共に食事をとるが、尊大で貴族的という。かれらが開く舞踏会はどれも小型版オルマナックというところで、押し出しの立派なクレオールの御婦人は、信条が女性パトロンよろしく排他的だった。もう一方のひとたちは、クレオールから閉め出されてはいても愛想のよい混血女性たち、それに誰かがちょっとでも黒人の血で穢されていると聴くだけで純粋なクレオールの血への誇りで血管が膨れあがってしまうような、そんなやんごとなき場からは、なんとしても逃走できるクレオール紳士とで成り立っていた。

わたしが目にしたすべての偏見のなかで、もっとも極端で根深いのが、この混血女性たちにたいするものだった。裕福なアメリカ人やクレオールの父が認知し、ニューオリンズで金にあかして手にはいるあらゆるスタイルやたしなみ、また気配りと愛情が与えることのできるすべての上品さをほどこされて教育を受けた娘たち——絶妙の美しさ、優雅さ、やさしさ、愛らしさを身につけているのに、いかなる条件でもルイジアナのクレオール家族たちには受け入れられない。結婚もできない、つまり、どんな儀式を執り行おうとも彼女たちとの結婚は合法性がなく拘束力もない。だが、彼女たちの独特な魅力や美しさ、それに所作に込められた優雅さたるや、不幸にも常に選ばれて愛情の対象となってしまうほど素晴らしく効果的である。混血女性をはねつける恐ろしい権力がクレオール婦人たちの行使できる特権だとすると、しとやかな混血女性のほうは自分の魅力にそなわった力を使って、甘い危険な復讐だってできるのである。この不幸な人たちと暮らしを営むようになると、若干の不名誉はあっても、すべての夫婦生活がそうなれる程度には永続的で幸

せな暮らしを送れることも往々ある、という。

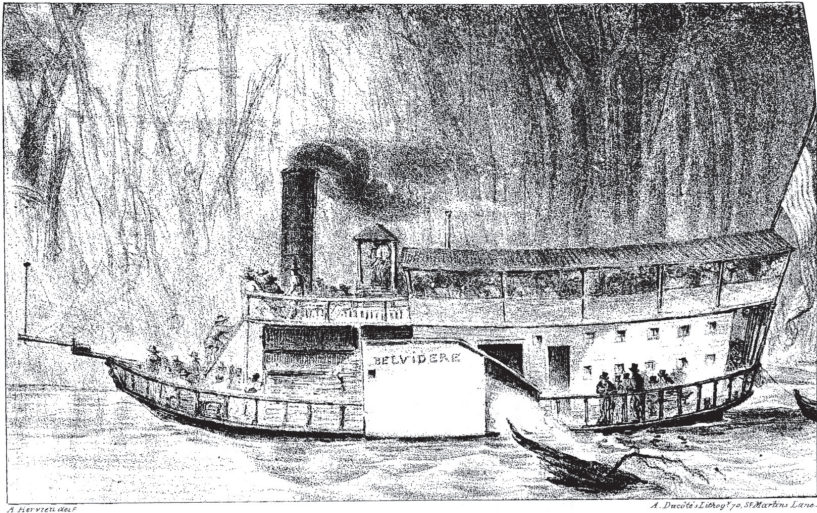
町にはフランス風劇場が一軒、それに英国風劇場も一軒ある。だが、ごく最近ヨーロッパから渡ってきたわたしたちは、どちらも好きにはなれず、じっさいニューオリンズの他の楽しみも、どれひとつ取ってみても気に入らなかったもので、ほどなくしてわたしたちはミシシッピ川を北上する旅を始めなくなった。

当時は今ほど有名ではなかったが（才気走った本をすでに一冊ならず書きあげていた作家）ミス・ライトが、ヨーロッパからわたしたちの航海にいっしょにいて、テネシーに彼女が購入した地で、わたしは彼女や彼女の妹たちと数ヶ月を過ごし終える狙いだった。数百万の人びとを震撼させるような（賞賛する人も十人程いたが）数々の意見を唱道してのちに有名となったこの女性には、イギリスを彼女と共にわたしが発ったときは、あとの仕事とは著しく異なる目的追求があった。アメリカ中のあらゆる町で広く演説するようになる代わりに、自身の言葉によれば、もっぱら苦しむアフリカ人のために、自分の財産も時間も才能もすべて捧げられるよう、西部の深い森に一生隠遁するつもりでいた、という。黒人と白人のあいだには、肌の色が違うほかは自然によってつくられた違いなどなにもないことを示すのが彼女のいちばんの目的で、黒人と白人の子供がいるクラスにまったく平等の教育を授けることで、それを証明しようと目論んだのである。この事実がいちど完璧に確立されれば、これまでになかったほど黒人の大義は確固たる土台に据えられ、文明化された国民のなかで、これまで黒人が占めてきた屈辱の身分は甚だしい不公正であるのが証明されよう。

われわれとニグロが頭脳は平等なのか、平等ではないのか、というのは大いに興味ある問題で、確かにこれまで公平に取り組んだ人がいない——それでわたしは、子供たちや自分自身のためにも、彼女の施設を訪問して実験が成功するのを見て、知識を得て喜びを味わいたいと期待していた。湖や川の多いこの地方では、無数の蒸気船が馱馬車や荷馬車代わりになっているが、ヨーロッパで見かけたものとは似ても似つかず、こちらの蒸気船のほうがはるかに優れている。外観の構造が最も似ているのは、パリにある「浮かぶ湯船」だろう。添付した挿絵で蒸気船の形を正し



くお分かりいただけよう。窓が二列に並んだ部屋はたいそう立派で、それぞれの窓の下には小綺麗な簡易ベッドがあり、その覆いが窓のカーテンに見えるようにベッドは配置されている。この部屋は紳士用船室と呼ばれ、男性の排他的特権が力説されるが、これはいささか女性には無礼というもの。朝食、夕食、それに夜食までこの部屋で供され、食事だけは女性船客にも許される。



NEW ORLEANS STEAM BOAT.

一八二八年元旦、わたしたちは大きくて優雅なベルヴィデール号に乗船した。波止場に現れたたくさんの船のなかで、いちばん大きく優雅というのではなかったが、ミス・ライトの住まいに最も近いミシシッピ川の岬メンフィスに停泊することになって、わたしたちが税関を通過して見物を終えたあと、ニューオーリンズを発つ最初の船だった。女性用にと定められた部屋は船尾展望台の下にしか窓がなく、すいぶん荒涼としてはいたが、この部屋と紳士用船室はきれいにしつらえられ、女性部屋にはカーペットが敷いてあった——ところが、このカーペットたるや、どんな代物だったかは言うまい、言いようがない。実物通り語ろうとすれば、スィフ

トのような人物の筆が必要である。アメリカ人の礼儀作法について気持ちよい印象を受けたいと思われる方なら、ミシシッピ川の蒸気船で旅を始めるのは止めるべき。わたしについて言えば、蒸気船の船室に閉じこめられる位なら、よく慣らされた豚たちと部屋を分かちあうほうがどれほど良いかしのれない、と真実断言する。

アメリカ人が絶え間なく飽きもせずに吐く唾ほど、イギリス的感性にひどい嫌悪をおこす迷惑をわたしは知らない。この唾や、ほかにも数語ムカムカするような言葉をなんどもわたしが繰り返すので、読者のみなさんにはお詫びせねばとを感じるが、忠実に描写すると避けられない。「アメリカ人の」というこの言葉を使うさい、わたしは一般的にすぎるかもしれない。ほとんど明快に異なる人びとからなる大陸を合衆国は形成しているのだから、今もいつも、わたしが語っているのは自分が目撃したそのなかのある人たちだけだ、と理解していただきたい。アメリカ人と話していて常に気づいたのは、どんな話題でもいいが、わたしが湘野だと考えているのが彼らにわかる事柄について水を向けると、その土地のことだけで全国的じゃない、とかならず彼らがわたしに請け合うことだった。たいへん小さな一地方の偶発的特異性で、決して全国の見本ではない、と。「アメリカをほとんど分かっておられないからですよ」というのが千回、またそれと同じ数ほど違った場所でわたしが耳にした言葉だった。なるほどそうかもしれない——と譲歩しつつ、でもじっさい目にしたことをお話しする際にわたしが公平を欠いている、との誹りがあれば、その誹りにわたしとしては抗議する。

### 第三章

#### 蒸気船に乗り合わせたお連れ —— ミシシッピ川の風景 —— ワニ —— メンフィス到着 —— ナショバ

暖かくて天気も晴れ渡り、船の防御通路（船室をぐるりと取り巻く廊下をそう呼ぶ）がたいそう心地よい場所なのを知ったわたしたちは、日が落ちるまでそこに腰を下ろし、ショールに身を包み、ときには他の乗客がみな引き上げたあともずっと、アメリカの澄んだ明るい月明かりの美しさを楽しんだ。十分な数の客が船には乗り合わせていた。甲板を占めるのはいつものようにケンタッキーの船乗りたちで、川の流れが時速四マイルで船を運ぶのだから、舵をとるほかには別に仕事をするでもなく、はるか遠くまで運んできた船と荷物を片づけたあと、ニューオーリンズからの帰り道である。二百人ばかり乗り込んでいた。ところが、この船乗りたちのいる場所は船室とは明快に別々で、マキを取り込むために停泊したときにしか、わたしたちにはこの人たちが見えなかった。そのときになると男たちは走り出し、というより、さっと飛び出すと互いの頭を飛び越えて岸にあがり、そこから蒸気エンジンに供給するマキ運びの手伝いをするのだった。この仕事をするのを、自分たちが払う船賃の一部として男たちは請け負っていたのである。

いっしょに船に乗り込んだ下男が男たちと同じ部屋になったので説明してくれたが、実際手に負えない連中で、いつも賭け事が喧嘩しており、<sup>しらふ</sup>素面でののはまれ、しかも毎晩、平等主義や財産共有主義への尊崇への念を実際に証明してみせないと夜も明けない、とか。船のパーサーが親切な人で下男を保護してくれて自分が使っている隅っこの小さな部屋に寝棚を割り当ててくれた、もっともこの部屋も外から入って来れないわけではないので、夜はけっして時計や持ち金は肌身離さないようにと、下男は言われたほどである。道徳的特質がどうあれ、このケンタッキーの男たちは見かけだけはたいそう高貴な感じで、平均身長はヨーロッパ人よりかなり高く、往々にして赤毛で損なわれてしまうときがあるが、それ以外は容貌もたいそうハンサムである。

キャビンの紳士たち（女性は皆無）は言葉、物腰、外見のいずれをとってもヨーロッパではその名称を授からなかっただろう。だが、紳士への資格はもっと実際の根拠によっていたのが、やがて分かった。ほとんど全員が将軍、大佐、少佐といった称号で話しかけられているのを耳にしたのである。のちにイギリスから来た友人にこうした軍隊呼称を話すと、彼が言うには、自分も同じようなタイプの連中と船旅をしたが、そのなかにひとりとして大尉がいないのに気づいてそのことを乗客に話し、どう考えればいいのかと尋ねた、とか。すると「あー、デッキにはキャプテンがいっぱいですよ」という答えが返ってきた。

ところが称号は将校用ばかりでなく、なかには判事というのもいたのである。イギリス人とは異なった国民に外観や物腰のうえで変わっている点があるのを馬鹿にするのは安易だし、ねたみも買おう、というのはわかる。アメリカ人から見れば、われわれだって同じ試練を受けるかもしれない。わたしにすれば新しいものが、新しいからといって何でもいかがわしい、と考えるわけではない。だが、わたしを取り巻く目新しいものは、その多くが不快だと感ぜざるを得なかった。

ありふれた作法がテーブルではすべてまったく守られず、食事は手づかみでガツガツむさぼり、洗練されないおかしな言い回しに発音、忌まわしい唾吐きのために、わたしたちのドレスが汚れてしまうのを防ぐこともできず、食事と言えば、刃先が全部口のなかに入り込んでしまいそうなほど恐ろしげにナイフを使い、もっと怖いのは食後ポケットナイフで歯を掃除することで、おかげで回りにいるのはヨーロッパの将軍、大佐、少佐なんかじゃなく、夕食は楽しみの時間とは決してならない、と感じてしまった。

わたしたちが船室にいたあいだにはずんだお粗末な会話と言えば、政治向きがすべてで、大統領の座を狙うアダムズとジャクソンの言い分はいずれも、わたしがそれまでに耳にしなければならなかったよりもひどい罵詈雑言を浴び、いっそう烈しい議論となった。ある大佐が少佐に掴みかかりそうになったが、すると大きな二メートルを超えるケンタッキー紳士たる馬商人が、これはたいへんとばかりに二人を恥じ入らせ、じっと腰掛けさせては「こん畜——」を浴びせた。わたしたちも「今畜生」



と言いたところだった。少なくとも、キャビンで静かに腰を下ろしていると、ほとんどそう言いたくなりそうで、食事に絶対必要な時間以外は一瞬たりとも長居はしなかった。

ニューオーリンズから北へいくと、ミシシッピー川の両岸は途切れもせず平坦に何マイルも変わらず続き、優雅に生い茂ったパルメット、黒く高貴なセイヨウヒイラギ、輝くようなオレンジがここかしこに見られ、見飽きもせずにずいぶん日が過ぎていった。木材を積み込むために船が停泊すると、そのチャンスを利用して十分だけ岸に出かけていくこともあった。こうしてサトウキビ畑を探検し、運べる限りの甘い戦利品をどっさり持ち込んだのである。サトウキビから簡単に絞り出せる甘美な汁は多くの乗客の気に入ったようだが、わたしの味覚には甘すぎた。同じように素早く、綿農園も訪れたこともあった。堂々たる広大な建物を誰かが修道院だと指摘したが、かなりの数の若い女性たちが修道女の教育を受けていた。

うんざりするほど続く森が水平線をなしているが、一、二カ所断崖——地面がせり上がりしばらく連なっているのをそう呼ぶ——があつてアクセントになっている。ナッチェズの町はこうした高台のひとつに位置している。暖かい季節には、この気候はニューオーリンズとおなじほど宿命的である。気候のことがなければ、ナッチェズは新しい入植者にずいぶん魅力をもつだろうが。明るく緑の丘と、四方に広がる黒々とした森の陰鬱な水平線とがかもしだす美しいコントラスト、豊かに成長したパイヤ、パルメット、それにオレンジ、生い茂って甘く匂うおびただしい種類の花々など、ナッチェズはさながら砂漠のオアシスのようだった。オレンジが戸外で実をつけ、覆いがなくとも冬でも枯れない最北限がナッチェズだったのである。この甘美な場所を除くと、通過してきた小さな町や村はどれもこれも、ずいぶん貧相に見えた。ニューオーリンズから離れるに従い、そのすぐ近くでは見られた豊かで快適な雰囲気は消え失せ、ギリシャやローマから仰々しい名前を借りてくることが多い、町と称する一、二軒の木造家屋を除くと、われわれこそが熊とワニの生息するこの領域に踏み込んだ最初の間人だ、と思ったかも知れない。だがそれでもときには、木こりの小屋が姿を見せ、早死にする危険を冒し（むしろ保証して

くれる) 金とウィスキーと引き替えに蒸気船に燃料を提供してくれた。こうした住居はほとんど皆、冬になると水浸したが、最良のは杭のうえにつくられ、最高水位に達しても哀れな住民が溺れ死ぬことはなかった。こうした気の毒な人たちは例外なくマラリア熱の犠牲者となるが、無謀にも燃えるような酒を絶え間なく飲んで対処していた。この連中のみすばらしい妻や子供たちのむさ苦しい様子ときたら、ひどいものだった。そうした光景がしばしば繰り返されたので、冷淡に眺めるだけというわけにはゆかなかった。顔は青白くて浮腫ではないかと思わせた。青白さは誰も同じで、哀れな子供たちもまったく同じぞっとするような顔色。ひざまで水につかりながら立っている哀れな牛や豚がいて、そこはお金持ちの家なの分かる。全体として言えば、ミシシッピー川の忌まわしい両岸に立つ木こりの小屋で見られるほど、人間性がどん底まで落ちぶれてしまった姿をわたしは目にすることがない。



WOOD CUTTERS CABIN ON THE MISSISSIPPI.

陰鬱なこの川には、ワニがおびただしく生息する場所があって、襲われる恐怖がそこに暮らすほかの難儀に加わる、とか。川岸近くに「落ち着き」、自分の小屋を

建てはじめた不法占拠者の話をわたしは聞かされた。この新参者の御近所といってもわずかしかなかったが、隣人たちは人付き合いも良くウイスキー好きだったので、みんなが木を切り倒して丸太を転がしては彼を助け、おかげで家はできあがって工事はほどなく終わった。妻と五人の子供たちは新しい家持ちとなったので、遠い道りを歩いてやって来ると、ぐっすりと眠った。明け方、父親たる亭主がかすかな叫び声で目が覚めて見上げると、三人の子供たちの残骸が床に散らばり、巨大なワニがまわりに子ワニを数匹したがえ、ゾットするような食事の残りを夢中で平らげているのを注視することになった。武器はないかとあたりを探すが見つからず、丸腰ではなにもできないのでベッドに静かに体を起こすと、なんとか這って行って窓を抜け、自分が帰ってくるまで残りの子供と寝かせてある妻がワニに見つからないように、と祈った。いちばん近い仲間のところに飛んでいった彼は、助けを頼んだ。半時間も経たないうちに亭主は二人の男と戻ってきたが、哀れ、遅すぎた！妻と二人の赤ん坊は血だらけのベッドにずたずたになって横たわっていたのである。満腹の爬虫類は男たちの攻撃をうけて簡単に餌食となったが、あたりを調べてみると、男の小屋が洞窟と言えるほどの大きなほら穴の入り口近くに建てられていたのがわかり、そこで怪物が憎むべきワニの子をふ化させていたのだ。

自然から<sup>とが</sup>咎を受けたこの地域を特徴づける荒廃した光景はいろいろあり、燃えさかる森がゾットするほどキラキラ光るのが、辺りが暗くなるとほとんどいつも目につき、風のせいでそうになると、立ち上る煙が重く水蒸気となってわれわれの頭上に漂うのだった。こうした光景はすべて目新しく、スケールも壮大だったけれど、のしかかるような恐怖で精神が疲労するのはいかんともしがたかった。精神疲労はなんの責任かと言えば、これまで話したディナーや夕食にもおそらくその一端はあろうが、森が終わることなく続くのを一週間のあいだ訝ったり、花綱で飾られたスパニッシュモスのカーテンに最初は感嘆しつつもやがて退屈し、目のまえを流れたり通過してゆく、種類が異なるおびただしい量の木材をこちらが「倒れ木」、「丸太」それに「沈み木」というように区別できるようになり、またケンタッキーやオハイオ駐屯地の紳士たちは、ロンドンはセントジェームズ宮殿やパリのテュイルリー宮

殿の紳士とおなじ「属」の人たちではないのだと気持ちを固め、もっと眠って時間を過ごすことができればいいのに、と思いはじめたのはこうした恐ろしさのせいだった。北上するにしたいが、もはやバルメットが美しく並んでいても歓声もあげなくなったし、寝こんだワニをときに見つけて愉快がることもなくなってしまった。こんな調子で、一マイル進むたびにメンフィスに近づいていると信じて喜んで来たときのこと、突然烈しいショックに襲われて恐怖に慌てふためいた。

「沈み木だ！」一人が言った。

「倒れ木だ！」別の声だった。

「座礁したぞ！」叫んだのは船長だった。

「座礁、おやまあ！どれだけここにいることになるのだろう？」

「神様しかわからんが、おれの根気がなくなりそうなだけいなとな。」哀れなイギリス婦人はそのあいだ、どうしただろう。

少しでも動き出すまでに朝食二回、ディナーも二回、それに夕食をいちど確かにとった、それもオハイオやケンタッキーの紳士たちといっしょに。こんな調子で囚われていたあいだも、蒸気船が何隻か通り過ぎていったが、われわれを引き離そうと試してくれるだけの力がない船もあれば、引き離そうと試しはしても、首尾よく成功する力はない船もあった。遂に巨大で強力な「生き物」が近づき、引っ掛け鉤かぎを投げてよこすと三分で事は終わった。木々と泥がふたたび素早く流れ去っていくのが見え、デッキにいた乗客の誰もが喜びの声をあげた。

メンフィスは高い崖の上に立っていて、到着したときはほとんど近寄れなかった。雨が長時間土砂降り、険しい坂はどんな坂でも上ってゆくの難しかっただろうが、運悪く新しい道路が最近区画され、途切れのない崖のほうは足場がしっかりしていたのに、そのあととはほとんど底なしの泥のなかに入り込んでしまった、という次第。ぬかるみに靴も手袋も無くしてしまったが、それは手足を喜んで使ったからで、まことに嘆かわしい状態で大きなホテルに到着した。

ミス・ライトはメンフィスでは有名で、彼女の到着が告げられると、誰もがただちに彼女を出迎えようと気を張り詰め、おかげでホテルでいちばん良い部屋が手に

入った。新しくはあったが、わたしにすれば建物はずいぶんわびしい感じだった、もっともそのときはアメリカ西部にやってきたばかりで、アメリカ人の言い方で「なんとかやっていく」という彼らの流儀に慣れていなかったが。この言い回しはみんなのあいだでいつも使われていて、生活の快適さはぎりぎりまで切り詰めて生存する、という意味らしい。

だが、ぐっすり眠って朝に目が覚めると、わたしたちが滞在していたモルタルが臭うその場所を、ミス・ライトのナショバにすぐにも変えてみたい、などと希望に胸ふくらませるのだった。

ところが前の晩に降った雨のせいで、どんな種類の馬車に乗るにせよ、テネシーの森林を思い切って走り抜けるなどというのは危険だというのが、やがてわかった。そこで、その日は奇妙で気持ちのよくないホテルですごすしかかった。蒸気船のせいでお付き合いの食事にはうんざりだったので、わたしたちの部屋で冷たい鹿肉とピーチソースがいただければ感謝しただろうが、ミス・ライトはダメだ、と言う。そんなことを言い出せばホテルの女将<sup>おかみ</sup>が自分に対する個人的侮辱と考えるだろう、そしてきっと拒否されるだろう、と。あとの議論には重みがあったので、ホテル二階の窓から大きなベルが鳴るのが聞こえてくると、われわれは食堂へと進んだ。五十人ほどのためにテーブルが置かれ、すでにほとんど満席である。わたしたち一座は「女将」の近くに光栄にも座れたが、その榮譽のせいで偉そうな気分になってはいけないというので、召使いのウィリアムはわたしとはほとんど反対側に腰を下ろした。居合わせたのはどんな人たちだったかと言えば、小さな町の店主（アメリカではどこでもストアーキーパーと呼ばれる）である。ミス・ライトの友人である市長も加わっていた。気持のよい紳士的な人で、ミシシッピ川に面した小さな町には奇妙に場違いのように見える。ホテルが建築されてから、町の男性はみんなホテルで食事し朝食をとるのが習慣になっているとか。まったくものも言わず、それも驚くべき早さで食べるので、わたしたちのが始まるまえに文字通りもう終わっていた。食べ終わったその瞬間、食堂に入ってきて以来のむっとりした沈黙のままテーブルからさっと離れる、すると二番目のグループが席について、おなじように沈黙



したまま自分たちの役割を果たすのである。聞こえてくる唯一の音といたらナイフやフォークの音、それに尽きることのない咳払いのコーラス付き。わたしたちと女将を除くと女性は誰もいない。メンフィスの淑女連は、御主人にアンダーソン夫人の七面鳥と鹿肉を賞味させておくだけで御満悦（亭主のために料理する手間は省けるが）で、自分たちは家で粥とミルクをおいしく味わう、のである。

その日は残った時間を小さな町をぶらついて愉快にすごした。メンフィスはミシシッピ川でも、もっとも美しい所にある。このあたりは川がぐっと広がって堂々たる湖のようで、そびえるほど高い森の木々で覆われた島が流れをふたつに分けるが、島のおかげで広々とした陰ができて川の流れが画一的になるのを和らげている。ミシシッピ川に無数にある支流のひとつ、ウルフ川から崖に沿ってメンフィスの町は不規則にとりとめなく下流に一マイルほど伸びている。町を越えると、崖は半マイルほどが木を取り払われ、馬、牛、豚のために見事な牧草地を提供している。牧草地の両脇には森が再び黒々と壁のようにそそり立ち、「ここまでは来させてやるが、先はもうだめだ！」と人間に語っているようである。この警告をしかし、勇氣と勤勉さはものともしなかった。この長い通りの背後では建物がまばらにしか点在せず、町は森に戻ってしまい、もっと離れた丸太小屋に通じる粗末な道は一步進む毎にいっそう荒涼となる。地面はときに流れだす水で分断され、その流れを越えるための橋といっても木の幹を流れに渡し、その幹が十字に渡されたもっとも細い幹を支えているだけ。こうした橋は渡って楽しい、とはいえない。人間が踏んでもぐらつくし、馬や馬車が通ると恐ろしいほど揺れる、絵にはなるけれど。背がずいぶん高い木々、その木々から垂れ下がるおびただしいばかりの蔓の枝、色鮮やかな羽根の鳥、特に小さな緑のオウムなど、ここは新世界なのだ実感させる。次の日の朝、散歩を繰り返していたら楽しかっただろうが、ミス・ライトは家に着きたがったし、彼女と変わらぬほどわたしたちもナショバを見たかった。二頭の馬が引く無骨な幌馬車がわたしたちのために用意され、森を十五マイルすすむ長旅にわれわれは意気揚々と出かけた。さきに話した不安定な感じがする橋のひとつを越えるのを避けるため、黒人の御者は流れに踏み込んでいった——「問題になる」ほどの深さじゃ

ない、と請け合う。ところが、ほどなく轅<sup>ながえ</sup>は見えなくなるし、馬車も明らかに沈み込んでいくので、この先も進むのは危ないと穏やかに諫めたが、ニタニタ笑うだけで、馬にむち打つことで御返答。前輪がやがて水中に没し、前のめりに突っ込んだ馬が足をばたつかせるので、こちらは驚いたが、御者は困惑の色さえ浮かべない。引き綱を結びつける横木が遂に折れたが、すると黒人の哲学者が落ち着き払って言うには、「にっちもさっちも行かないので、馬に乗って出かけるのがいちばんでしよう。」穏やかに微笑みながら様子を見ていたミス・ライトは「そうね、ジェイコブ、そうしないといけないわね」と言った。いささか難儀はしたけれど、こうして元の岸に戻ると、ふたたびアンダーソン夫人の暖炉のまわりに集まったのである。

水が引くまで出発は延期すべきだと決まったが、早く宿舎にたどり着きたいミス・ライトは待ちきれず、わたしたちの召使いがついて、またも馬に乗って出ていった。召使いが言うには、剛胆きわまりない狩人でもくじけそうな場所を二人で越えたが、「ミス・ライトは気にもとめなかった。」

次の日ふたたび出発したが、澄んだ空気、きらめく光り、新奇で素晴らしい黒い森や鋭く呼び覚まされた好奇心のおかげで旅は楽しく、縮みあがることもなく、衝撃や打ち傷にも耐えられた。ほどなく道路らしきものはなくなってしまった、少なくともわれわれにはそう見えた。道を開くために切り払われた木々の切り株が、九十センチほども残って突き出ている。それを越えて、われらのオンボロ馬車ディアポーンは無事に進んでいった。だがどの切り株に出くわしても、これが最後ではないと納得するまでには、何マイルか経験が必要だった。こうした切り株のあいだを、冷静かつ容易く御者が馬や車輪を巧みに曲がりくねらせて通り抜けてゆくのを眺めるのは楽しかった。この人なら、ボンDstリート（訳注 ロンドン中央部の高級商店街）に呼び込んでも、ずいぶん役に立ちそうだった。一マイル進む毎に森はさらに生い茂り荒涼としてきた。だが、いつものようにニタニタ笑いの黒人御者は、道はこれでいい、きっとナショバに着くという。そして実際に着きはしたが、ナショバにつくと抱いていた思いはどれも真実からはほど遠いのが、一目でわかった。荒涼としている、としか感じられなかった——出てきた言葉はそれだけで、

口には出さなかったが。森にある宿舎の光景がわたしに与えた痛ましい印象を、ミス・ライトはよく分かっていたと思う。ここで数ヶ月いっしょにすごせば、どちらにとっても楽しみをもたらすだろう、と考えたのは間違いだった、とふたりとも同時に納得したことは疑いない。だが彼女のために公平に言えば、そのとき目のまえにあったもので心がいっぱいだったミス・ライトにすれば、ほかのことはみんなどうでもいいか、取るに足らなかった、と信じる。そのときの彼女の熱中ぶりは、むかしの宗教的情熱に例があるのを除けば、わたしはほかに聞いたことも読んだこともないほどだった。

ヨーロッパの快適さや洗練になじんできたミス・ライトが、自分だってこの荒野で生きていける、そればかりかヨーロッパから来た友人だって荒野に足を踏み入れ、こうした未開の光景をまえにしても困惑することもあるまい、などと想像できたのは宗教的情熱と同じように強力な、なにかの感情のおかげに違いなかった。付け加えておいた図は、森を切り払った空間と宿舎を構成する建物とを忠実に再現している。いずれの建物にも大きな部屋がふたつずつあるが、粗末な家具しかなく、生活に必要なもののなかで、普通の考えではちょっとした快適さだと思われるようなものも、まだなにもまとまっていなかった。だがこうしたことをまづいとは、わが哲学者的友人は思わなかったようだ。無関心を装っていたわけではまったくなく、彼女にすればこうしたことも真実気にもならない環境だったのである。彼女の心と魂は、アフリカ人をヨーロッパの知的レベルまで引き上げる希望だけでいっぱいになっていた。彼女の好ましいこうした想像力の骨組みが足元にバラバラに落下してゆくのを目撃してしまった今でも、希望に自らをゆだねたミス・ライトの自己献身を思い出すと、彼女を賞賛せずにはおれない。

ナシヨバで見かけた白人といえ、ミス・ライトの妹で愛想の良い——夫人、それから彼女の御主人だけだった。夫妻には奴隷が子供も含めて三〜四十人はいたと思う。だがナシヨバにいたときは、学校はひとつもできていなかった。大いなる実験のために、本やほかにも資材が集められたし、教授もひとりふたり雇われてはいたが、すべてが未組織だった。——夫人は体調がずいぶん悪く、気候のせいだ



と彼女は認めていた。当然ながらわたしは自分の子がたいそう心配になり、なるべく早くナショバを出て行こうと決め、十日経った頃にはそこを後にした。

ミス・ライトの想像力をあれほど捉え、彼女があれだけ大金を費やした計画をなぜ放棄したのか、その直接の原因がなんだったか、わたしには正確にはわからない。だが、何ヶ月も経たないうちにミス・ライトと妹がナショバを後にしたことを知ったわたしは、おおいに喜んだ。ナショバに帰ったミス・ライトは、気候があまりにも敵意に満ちているのおそらく知ってしまったのだろう。ナショバについてわたしが更に知っていることと言えば、目的達成が不可能なのを、なんらかの理由で分かってしまったミス・ライトが、奴隷たちといっしょにハイチにむかい、大統領の保護のもと、解放した奴隷たちをハイチに残していったことである。



SETTLEMENT OF NASHOBA &c.

ナショバ近辺の景色には美しさがどこにもなかったし、夏になっても美しくなるとは感じられなかった。木々が互いに接近しすぎて、下生えが育たなかったのである。ニューオリンズでは森におおいに彩りを添えていた下生えもなかったし、ほか

になにもないときは埋め合わせとなる、光と影が織りなす変化に富んだ効果をうむ空き地を目にすることも、なおさら少なかった。宿舎の周りに木を切り開いた空き地もあったが、わたしには不十分かつ不完全に思えた。もっとも、綿やトウモロコシは立派に収穫したと聞いたが。気候も乾いて心地よく、夜空の様子は驚くほど美しかったし、あれほど月の光が清らかに澄んで力強いのを見たことはなかった。一八二八年一月二六日メンフィスに戻ると、そこで五日間シンシナティ行きの蒸気船待ちで足留めをくった。夫トロロブを待つため、家族共々西部のこの中心地に移る決心を固めていたのである。メンフィスで話した誰もが言うには、あらゆる面から見てシンシナティがアレゲニー山系の西ではもっとも素晴らしい状況という。メンフィス周辺にある森の空き地をなんども気持ちよく散策し、朝夕川に映える地平線に感銘して楽しんだおかげで、わたしたちを運んでくれる船は根気強く待つことができた。

## 第四章

### メンフィス出発——オハイオ川——ルイヴィル——シンシナティ

一八二八年二月一日、クライテリオン号に乗船したわたしたちは、放逐された哀れなインディアンたちが「父なる流れ」と呼んでいたミシシッピ川の流れにふたたび身を任せた。船に乗り合わせた一行といえ、ニューオーリンズから来たときに出会った人たちと素晴らしくよく似た人たちで、きっと従兄弟なのだろう、風変わりなのは、このひとたちも軍の高位までたどり着いていたことである。ウルフ川を何マイルも退屈しながら北上するあいだ、景色といっても、やっぱり見えるのは唯、森、森—森—森だけ。ひとつだけ変わったのは、川が後退するところでは流れが反対側の岸に食い込んでいることだった。こうした変化はいつも起きているが、原因については誰も納得いく説明をしてくれなかった。川が岸を浸食しているところでは、木々が水中何フィートも浸かったまま成長しているが、しばらくすると水のために根が弱り、最初の台風が吹くと簡単に倒れてしまう。これがメキシコ湾に流木がおびただしく流れ込むひとつの原因である。川が後退したところでは、若々しいトウの茂みが発生するのが見られ、気候のせいであつというまに成長してゆく。こうしたふたつのできごとのおかげで、千マイル変わることはない植物の壁にも、ある程度の変化がうまれる。もっとも、われわれはニューオーリンズのフランス語で美しい川「ザ・ビューティフル」と揺るぎなく呼ばれる川に近づきつつあった。数日経つと「命取り川」と露骨に名付けられた、あの黒く濁った流れを離れる（永遠にと信じる）ことができたが、この川はその名に確かにふさわしい。兩岸の空気ときたら悪臭がひどく、泥だらけの水面下に沈み込んで、ふたたび浮き上がってきたものなどない、とか。なだらかな起伏の国と呼ばれ、平坦な場所といっても一カ所が十歩くらいしかないような地域を流れ、みんなが「美しい川」と呼ぶオハイオ川はその名にふさわしく澄んで輝き、兩岸はどこまでも変化に富む。原初の森はまだかなりの部分を占め、崖から重苦しく張り出している。だが、森はときおり集落が姿をみせて途切れ、そこにいる牛や羊の姿に慰められた。オハイオ川はほとんどあら

ゆる川の景色を提供しているように思う。ときには澄んだ波がなだらかな芝に水を与えるかと思うと、切り立った岩に囲まれ、陽気なポーチが見えるきれいな住まいが荒涼たる森の連なりと交互に姿を見せ、絡まりあった熊の檻おりが見えると、その家の住人が土地の生まれだ、というのがわかる。山から下る奔流がときに川の流れに銀色の貢ぎ物をもたらし、もしも廢墟と化した教会堂や中世の城があらわれ、現実生活のロマンスを自然のロマンスと調和させれば、オハイオ川は完璧だろう。

こうした素晴らしい景色の効果たるや絶大で、昼のディナーや夕食についての不平はわれわれの口からは出なくなった。いや、通りすぎてゆく素晴らしく美しい景色を見逃してはたいへんと、食卓の隣人たちが飲み込むようにむさぼり食うその早さに、われわれも負けにくいらいのスピードで食べだしたのである。

オハイオ川兩岸はこうして魅力的ではあったが、それでもやはり健康的とは言えなかった。一度ならず上陸して木こりの家族と話し込む機会があったが、「最近熱病で亡くなった」家族の話を目にしないことは、ほとんどなかった。みんなマリアにやられてしまう。彼らの住まいはミシシッピ川沿いのものよりはるかによかったが、住民は金と引き替えに命を売っている人たちのようである。

ルイヴィルはかなりの町で、オハイオ川の南側、ケンタッキー川を望むこじんまりした位置にある。町で見るだけの価値あるものは見て回り、数時間を過ごした。たちの悪い熱病が暑い時期になると猛威をふるうことがあると聞かなかつたら、美しい近郊を訪れるために数ヶ月をルイヴィルですごしたい気分だった。フランクフルトもレキシントンも訪れるだけの値打ちはある町だが、辺鄙なところであって、わたしはどちらも行かなかった。フランクフルトはケンタッキー州の州都で、レキシントンには独立心旺盛な一族がいくつか暮らしており、アメリカで人びとが普通に享受する以上に時間を自由に使えるおかげで、当然それに付随していっそう洗練されている、とか。

ルイヴィルを下流に一マイルほど行くとオハイオ川は滝になり、早瀬があって流れが速いため船は雨期を除くと通過不能である。滝の下まで来た乗客は下船するとルイヴィルまで陸路旅をし、待ち受けた船に乗って残りの航海を続ける。こうした

不便をわたしたちは免れたが、これは早瀬をあまり感じないほど水位が高かったおかげで、やがてルイヴィル運河が稼働するようになればまったくこの不便はなくなる。運河が稼働すれば、滝の下から町まで進んでゆくことができるだろう。

ケンタッキー側の景色は、インディアナやオハイオ側よりもはるかに素晴らしい。ケンタッキー州は多くのインディアン部族お気に入りの地域で、共通の狩猟場として彼らのあいだで残されていたせいで、いまだにケンタッキーの名を口にするとインディアンたちは胸がいっぱいになり、その思い出に悲しく激しい哀歌を歌う、とか。だが、ケンタッキーから彼らが追い出されたのは最近のことではない。イリノイ、インディアナ、オハイオよりも入植の歴史でいえば長く、文化的レベルももっと高いばかりか、土地もさらに肥えていて景色も美しいようである。ケンタッキーよりも豊かな牧草地はほとんど見たことがない。あまり密生していない場所では森の木々が堂々と成長し、土地を痛めつける作物を変えもしないで連作する無駄な農業が土壌を疲弊させることがないところだと、壮麗に豊かな収穫がある。二十年間連続して小麦が豊かに実る場所を見せてもらったが、ほかの作物を合間に植え付けずにタバコを生産し続けると、もっと短い期間で土地はすぐにへたってしまう。

シンシナティに着いたのは二月十日だった。町は水辺から穏やかにそそり立つ丘の南側にあり、素晴らしい場所である。だが、目を見張るように見栄えがする町というのではない。教会のドームや塔、尖塔などはない。ただ栈橋は堂々としていて、四分の一マイル以上も伸びている。舗装が行き届いており、均整はとれていなくても小ざれいな建物に囲まれている。いちどに蒸気船が十五隻も停泊しているのを見たことがあるが、それでも波止場はまだ半分が空っぽ。

到着するとワシントンホテルに赴いたが、定食ディナーにちょうど間に合いましたよ、と聞かされてラッキーなことだと思いはした。ところが食堂のドアが開いて、六~七十人ほども男性がテーブルにすでに着席しているのを目にしたので困惑の呈で退いた。家族の女性メンバーと別室でディナーをいただくと、そのあとながく宿泊できる家を探しに出かけた。

不動産関係情報ならお任せ、と公言する広告事務所にてかけて望みの住居を知ら

せると、相手は難しいことも言わず、若い者を町の案内役に付けますから、お望みの物件をご覧に入れましょう、と言った。そこで彼といっしょに出かけると、あれこれ通りを案内してくれはするが、これぞと思うものは全然ない。立ち止まったわたしが、見に来た家というのはどのあたりにあるの、と聞いてみると、

「貸家のビラを探してるんです。」との答え。

この人がいなくても自分たちだけでも探せただろうと思って、あなたがいなくても結構ですと言うと、急にえらく活動的になった様子で横を通りすぎる家を一軒ずつ規則的にノックし、貸す気はありませんか、と尋ねてまわる。こんなに長い時間我慢するのはできない相談なのでガイドを首にしたが、あとで彼に一ドル払う羽目になってしまった。

ところがまもなく幸運にも住まいが見つかったので、準備が整い次第その家を手に入れるつもりでホテルに戻った。夕食を七十人の紳士たちといっしょに食堂でとるのも、酒場にいる五、六人の女性と食べるのも気が進まなかったので、自分の部屋で飲もうとお茶を頼んだ。機嫌はいいが、なんだか恩着せがましいアイリッシュの女性が進み出て、手をとって言うには「まあ、国からいらしたんですね。みなさんだけでお茶が楽しめるよう取りはからいますわ、ねえ。」こう請け合ってくれたので、部屋にわたしたちは戻った。その部屋は広さも備え付けベッドも立派だったが、カーペットがなくてぶら下がっている紙ブラインドのせいで薄暗い。採光や換気が欲しいときは、窓枠に落ち着き悪く取り付けであるヒモで紙ブラインドを巻き上げて止めておく必要があった。このあと、アメリカ中どこに行ってもこの同じ厄介なブラインドに直面することになった。

やがてアイルランド人のわが友がまた顔を出して紅茶を運んでくれたが、アメリカ人がお茶を飲むときの常の友がいっしょに出てきた。なまを細く削り吊した干肉、ブラウン・シュガーの色と味がするいろんな形の砂糖菓子である。お茶を飲み、この先どうするか家族で話を楽しんでいると、ドアを大きく激しくノックする音が聞こえた。「お入りください」と応ずると、かつぶくの良い人物が顔を出してホテルの経営者です、とのたまう。



「どなたかご病気ですか？」そう切り出してきた。

「いいえ、ありがとうございます。誰も悪いところはありませんが」と答えた。

「だったら奥様、こういう条件でお泊めするわけにはまいりません。ここでは御家族がそろってお茶を飲むようなことはできません。わたしや妻といっしょに暮らしていただくか、まったくだめかのどちらかです。」

威厳ある態度でこう言われたので、ほとんど返事できないほどだったが、思い切っていささか弁解めいていても、わたしたちはアメリカの礼儀には疎く不慣れなので、と遠回しに言ってみた。

「わたしどものマナーは申し分ないもので、それをイギリスの方に変えられるのは愉快ではありません。」

あとになってスコットの『ガイアスタインのアン、霧の乙女』（一八二九）を読んでいたとき、このワシントンホテルのオーナーのことを考えてしまった、というのもじっさい、この小説のなかで不滅となった宿屋の経営者と瓜二つだったから——どこで、いつ、どのように客に食事させ、水を飲ませ、寝床に着かせるか自分の気に入ったように決めてしまう作品中の経営者そっくり。それ以上の抗議は止めて、引っ越しを急ぐことに決めた。次の日には引っ越しがかない、大満足だった。

ほどなくして新しい住まいに落ち着いた——こざれいで気持ちよさそうだったが、ヨーロッパ人から見て人並みの快適さに必要と考えられる設備がすべてないのに、すぐ気づいた。水をくみ上げるポンプとタンク、排水設備皆無、ゴミ収集カート、ロンドンだったらあつという間に消えるのでゴミがあるのに気づく間もないが、ここではゴミを片付けるための普通の手段も一切なし。おかげですぐにゴミがたまってしまふので大家さんを呼びにやったわたしは、ありとあらゆるクズをどう片付ければいいのか尋ねてみた。

「ゴミは通りのど真ん中に召使いの方がキチンと置くのです。でも奥様いいですか、真ん中じゃないといけません。ご存じないでしょうが、そういうものを通りの脇に棄てるのを禁止する法律がありまして、ど真ん中にすべて放り出すのです。すると豚が全部持って行ってくれると。」

じっさい町の隅々まで、豚がこうした超人的サービスを果たしているのがいつも見られる。不快なこの動物の群れに囲まれて暮らすのは、あまり気分の良いものではないが、あれだけたくさん豚がいて活発に清掃人としての能力を発揮するのは結構なことではある。というも、豚がいないと通りは腐敗状態がいろんな段階にある、あらゆる物体で詰まってしまうだろうから。

その美しさ、富、比類なき繁栄ぶりなどシンシナティについてはあれほど多くを耳にしてきたので、メンフィスをたってシンシナティに向かったとき「旅をすればパリで到着」というルソーの修練女の喜びを、われわれもほとんど感じたほどだった。それで家のことで細々した処置を終えると、この「西部の驚異」、「魔法の成長を遂げる預言者のヒョウタン」、この「幼いハーキュリーズ」を見物しようと出かけた——確かにどんな旅人でも、そのときのわれわれほどシンシナティが綺麗だと感じるのに都合の良い状況のもとで、ある町を歩いた人などいなかっただろう。ロンドンの栄光を後にして、すでに三ヶ月がわびしく過ぎたが、その間ほとんどずっと船と蒸気船が提供してくれたもの以外にはどんな建物も目にしたことがなかったわれわれである。ニューオリンズを別にすると、人の住まいはその痕跡をほとんど目にしなかった。だから煉瓦と漆喰の眺めはほんとうに爽やかで、三階建ての建物は素晴らしく思えた。こうした素晴らしい建物は繰り返しあらわれ、煉瓦造りの教会まで目に入ってきた。この教会は小さな尖塔がふたつあるせいで、二角教会というそうだ。だが悲しいかな、想像力が活発に働いたあとでは現実が平板だった。奥深い荒野から新たに身を起こしたこの町で、わたしがなにを見つけ出すつもりだったのかは分からないが、ソールスベリほどの規模を持つシンシナティはたしかに小さな町ではないにせよ、大きな建物はどれをとっても美しく飾られているわけではなく、ただ騒がしくて賑やかだと感じさせる程度である。町の様子から予想するより人口は多いようだ。ひとつには、リトル・アフリカという怪しげな所に集まっている自由黒人の数が多いこともあろうし、製紙工場やそのほかの工場の周りが密集地域になっていることもあろう。二千人を越える住民が暮らしていると思う。

シンシナティに着いたのは一八二八年二月で、そのときの町の様子をお話して



いる。小規模教会がそのあとにいくつか建ったので、単調に立ち並ぶ建物群のなかで教会の塔が心地よいアクセントになっている。あのとき全面舗装されていたのは幹線通りのメイン・ストリートだけだったと思う。メインストリート（本通り）はイギリスの町で言えばハイストリートに対応するもので町全体を端から端まで通っている。歩道は煉瓦造りでまあまあよく敷いてあるが、シンシナティには排水設備がなにもないのでにわか雨が降るたびに水浸し。町の位置からすれば建設が簡単だし必要でもあると予想されるから、排水設備の欠落はそれだけいっそう異常である。シンシナティは川縁で隆起しはじめる岡の側面に建設されており、簡便きわまりない排水設備でも設置しさえすれば、あの地のひどい<sup>べり</sup>にわか雨が降るたびに、いつも排水溝は綺麗だろう。現状では雨が高い位置にある通りを洗い流すから、ゴミはけっきょく、いちばん低い場所<sup>べり</sup>に集まることになる。重要度からいうと本通りの次にあたる通りでも、おなじことが起きる。本通りと直角に交差するこの通りには、町の大きな倉庫の大部分が並んでいる。集まったゴミの山は恐ろしい厄介者で、暑いときにはきつと毒気を発するだろう。

アメリカの町はだいたいどれもそうだと思うが、シンシナティの町も（土地の人が「スクエア」と呼ぶ）四角でできあがっている。ところが「スクエア」といってもイギリスとはあべこべで、そのなかになにもないどころか、しっかりと建物がつまっているのである。町の計画が完成したときには、どのスクエアも東西南北に面する多くの建物からなるブロックひとつで構成されるか、そのはずである。どの家も小道で連絡しており、そこに勝手口がある。しっかりと排水できるなら、この都市計画も悪くはないだろうが、なにぶん現状ではこの小道がお粗末きわまりなく、一年たつたびにますます悪くなるだろう、と思う。

シンシナティは北を森に覆われた丘が連なって取り囲んでいる。丘はけっこう陰しく岩だらけで家を建てたり耕作はできないが、かといって頂に登ればかなりの程度あたりを見渡せるほど高い、というのでもない。夏は枯れるが、冬になるとずっしりした流れをもたらしてくれる深く狭い水路で丘はわかたれ、それが別々にたくさんでき、景色に変化が生まれるが、町の周囲何マイルを見渡しても変化といえ

それしかない。素敵なオハイオ川は姿が見えるところはどこも美しいが、市内でその美しさを味わえるのは土手にもっとも近い通りだけ。町の反対側で川からおなじほど離れた距離にそびえるケンタッキーの丘陵地帯は、シンシナティが築かれた流域の南境となる。

最初に着いたときこそ、多くの木々に覆われたあたりの丘がずいぶん美しいと思いはしたが、シンシナティを離れるずっとまえから、閉じ込められたような眺めにはもううんざり、イギリスのソールスベリ平原でもあれば気持ちよい変化になっていただろう。わたしや子供たちほど、なんどもこの丘に登ったシンシナティの住民はいないだろうと思う。ただし、わたしたちが毎日のぼったのは、美しい景色のためではなくて、はっきり言えば自由な空気を楽しむためだった。あたりの丘には灌木の茂みもなければ花もないが、世界中でもっとも素晴らしいアナサンゴモドキの標本が手に入ったし、水路には化石がいっぱいだった。

森の木々は大きくもないし育ちも悪く、密生しているせいでてっぺんが絡まりあっている。ここでは野生のブドウも美しくならない、というのも美しい<sup>はなづな</sup>花綵も、花綵を支える木から伸びる高い枝にまで届かないと葉を茂らせることができないから。枝の下のほうでは空気も光りもひどく乏しく、もっと成長に都合のよい大気に届くまでは葉の落ちてしまった幹を伸びていくしかない。イギリスで「メグサハッカ」というハーブだけが、わたしが見つけた豊富に生えている草で、それも地面の木々がかなり切り払われた崖っぶちにしかない。ほかの場所では植物の生育が無理で、アメリカの「永遠の森」がこれほどいまましいのも、こうした環境による。ニューオーリンズ近郊ではパルメット椰子やポーポーの下生えがずいぶん美しいのに、テネシー、インディアナ、それにオハイオでは森の景色にこれっぽちも綺麗なところはなかった。腐食の段階たるや千差万別の落木、洪水があってから朽ち果てて積もり積もった葉っぱが地面を覆って空気を汚染する。常緑樹が茂らせるような葉っぱは育たず、テネシーやシンシナティを取り囲んでいるオハイオ州の一部では、岩が見せる不毛の美さえ欠落。ただし、川を越えてケンタッキー州に至ると景色はずいぶんよくなる。すばらしく成長したブナの木や栗が美しい川に沿って並ぶ。地

面もしっかり切り開かれているから牧草も立派。ずっと北方になるので実もできず花も咲かないが、豊かに生育したポーポーが素晴らしい茂みになっている。ここでは気品あるハンテンボク（訳注 ケンタッキー州の州花という）が繁殖して、花があふれるほど咲いている。

シンシナティとはほとんど逆で、ここではリッキング川がオハイオ川に注ぎ込む。美しい曲がりくねった流れで、河口から二、三マイルのあたりが急流になって白い岩のあいだを踊るように流れるが、もっと望ましい岩がほかにはなく、この岩をたいそうおもしろく思った。